戦国期の城下町構造と基層信仰

上井覚兼の宮崎城下町を事例に

千田嘉博

The Structure of Castle Towns and Religion in the Sengoku Period: the Case of the Miyazaki Castle Town of *Uwai Kakuken*

❶中世総合資料学としての考古資料群の統合
❷立地と歴史的背景
❸宮崎城からの眺望シミュレーション
❹宮崎城の構造
❺『上井覚兼日記』に見る宮崎城
❻上井覚兼と信仰

[論文要旨]

宮崎城は現在の宮崎市池内町に所在した戦国期の拠点城郭である。遺構がほぼ完全に残るだけでなく、一五八〇年から一五八七年にかけて城主だった上井覚兼（一五四五―一五八九）が詳細な日記を書き残したことで、城郭構造や城内の建物群に加え戦国期の上層クラスの武士の生活や基層信仰まで知ることができ、きわめて重要な城跡である。本稿は宮崎城に関わるさまざまな物質資料群を統合して歴史的検討を進める中世総合資料学の立場から検討を進める。

検討の結果明らかになったのは以下の諸点である。(1)宮崎城は綿密に設計された南九州を代表する戦国期城郭であり、外枡形や内桝形の組み合わせなど、南九州における戦国期城郭プランの特性と到達点とを示す城跡と位置づけられる。(2)城内には武家屋敷が二十軒以上建ち並び、主郭には主殿・会所的空間、庭園、茶室を備えた覚兼の御殿があった。(3)城主の上井覚兼は計画的かつ継続的に数々の神仏を信仰しており、きわめて多くの時間を信仰に捧げていた。(4)そうした振興の拠点となった寺社は散在的分布を示し、ゆるやかな宮崎城下町の外縁部を構成した。(5)宗教センター機能の集積度が象徴した宮崎城下町の都市機能の集積度の低さは、都市機能が城と寺社とを核とした広い地域に分散・分立し、それらのゆるやかな結合によって、都市的雰囲気をもった場を成り立たせていた城下町構造と評価できる。(6)これは卓越した都市的空間的な凝集を指標とした畿内・東海型の城下町とは異なった新たな類型の戦国期城下町像を提示する。(7)宮崎城下町の都市的集積を阻んだ要因には分散・分立した寺社も要因のひとつであり、覚兼の信仰そのものも、そうした中世的社会的構造に大きく規定されたものであった。

❶中世総合資料学としての考古資料群の統合

これまで戦国期の基層信仰や城下町、城郭研究は相互の連関を充分考慮しないまま、個別に行われてきた。しかし石塔群や墓地として認識される基層信仰にせよ、城館・城下町遺跡にせよ、本来ひとつの政治的・地域的なまとまりのなかで形成され、考古資料として残されたものであり、ひとつの社会的な営みを表出した個々の断片であった。

中世の政治と社会とを考古資料から解明しようとするとき、個々の資料についてくわしく検討することは重要であるが、一方でそれらを個別のものとしてくわしく把握するだけでなく、それらを統合して物質資料群から地域の政治と社会とを叙述していくことが必要になる。

本稿ではこうした立場から、物質資料からわかる城郭、城下、寺社の個別把握のみによる評価を止揚し、文字史料をも援用しながら考古資料から読み取れるものを歴史的に意義のある特徴的な地域構造の総体として叙述していきたい。こうした試みによってともすれば政治や社会構造と離れたまま石塔の変遷や宗教史の面から評価してきた問題を、地域史の枠組みの中に位置づけることが可能になる。さらに祖先祭祀に限らない多様な信仰のあり方を『上井覚兼日記』から瞥見することで、石塔造立の背景となった戦国期の基層信仰の実像の一端にふれてみたい。

❷立地と歴史的背景

宮崎城は宮崎市街の中心から北六kmに位置する宮崎市池内町に所在し、主郭は標高九三m、山麓との比高差が約七〇mの丘陵上に占地していた。宮崎城はいくつもの頂部や鞍部を含む南北に伸びた丘陵を利用しており、周囲の丘陵と比べてとりわけ高い地形ではない。しかし樹木が茂っている現状でも木々の間からの眺望はよい。また城下集落を形成するのにふさわしい支谷にめぐまれ、城の南西二kmには大きく蛇行した大淀川が迫って水運の掌握に適したことも、ここが城に選ばれた理由であろう。宮崎城には、池内城、龍峯城、目曳城、馬索城の別称があった。

この城の歴史は南北朝期にさかのぼり、その後、室町期から戦国期まで都於郡（とのこおり）城に本拠を置く伊東氏家臣が城主となった。しかし伊東氏は一五七二年（元亀三）に木崎原の戦いで島津氏に敗れ、一五七七年（天正五）の福永氏謀反を契機に豊後国に退いた。そして島津氏は翌一五七八年の高城耳川の戦いで大友氏を撃破して、日向国のほぼ全域を掌握した。

島津氏は一五八〇年（天正八）頃までに島津義弘領の諸方郡西部、島津氏一族の北郷氏領であった諸方郡南部などを除いた諸地域に地頭を配置し、地頭・衆中制を整えた。こうして成立した島津氏の日向国支配の拠点城郭は三〇ケ所以上におよんだ。宮崎城もそうした拠点城郭のひとつに数えることができる。

宮崎城は一五七八年に島津忠朝の家臣日置忠充が城主となり、一五八〇年（天正八）八月から一五八七年（天正一五）五月頃まで上井覚兼が城主になった。覚兼は一五四五年（天文一四）二月一一日生まれなので、三六才から四三才にかけてのことであった。このとき覚兼は島津家老中の職にあり、鹿児島にいた当主・島津義久の名代として佐土原城の島津家久を助け、先に記した島津義弘領、北郷氏領を除く日向国の政治と軍事を統括した最高責任者であった。だから宮崎城は島津時の日向国支配において、もっとも重要な拠点城郭であったといえる。

こうした重要性とともに宮崎城を戦国史上でわすれることができない城にしたのは、城主の上井覚兼が書き残した日記の存在である（『上井覚兼日記』大日本古記録）。南九州戦国史の基本史料になっているこの日記によって、宮崎城内や麓の構造が知られるだけでなく、政治や戦い、

日常の信仰・儀礼・文芸などのようすを具体的につかむことができる。これほど詳細な城主本人による同時代史料に恵まれた戦国期城郭は全国的にもまれである。後述するようによく残る現地遺構と合わせ、宮崎城の歴史的価値はきわめて高いと評価できる。

上井覚兼は宮崎城主として政務を果たすとともに、各地に出陣した。覚兼の宮崎城主としての最後の出陣は豊後国の大友氏攻めであった。一五八六年一〇月一五日に宮崎城から出陣し、豊後国利満城下の戦いで日向衆を率いて秀吉から派遣された仙石・長我部連合軍を撃破した。この年は大友氏の城下町の府中（大分市）で越年している。

ところが羽柴（豊臣）秀吉が「九州国分令」違反として島津氏討伐のため大軍を派遣したことを受けて覚兼は一五八七年三月に宮崎城に撤退した。当然、宮崎城の改修を進め、防御を固めたであろう。そして同年五月には進軍してきた羽柴秀長に降伏した。覚兼は降伏後すみやかに宮崎城を退去したものと思われる。羽柴秀長は覚兼が飼っていた白南蛮犬を強く望んだ。しかしなかなか白南蛮犬を譲らなかったようで、覚兼は督促を受けている。最終的にどうしたかはわからない。その後覚兼は薩摩国伊集院の地頭を務めたが、四五才の若さで一五八九年（天正一七）に病没した。

覚兼退去後の宮崎城は縣三城とともに高橋元種の領地になった。元種は縣の松尾城を本拠としたので、宮崎城は権藤種盛が城主を務めた。一六〇〇年（慶長五）の関ヶ原の戦いでは、高橋元種はのちに徳川方の東軍に寝返ったが、最初石田方の西軍に味方したため、東軍に属した飫肥城主伊東祐兵の家臣で清武城主の稲津掃部助に九月二九日夜に急襲された。権藤種盛は弟の種利、種公らと防衛に努めたが落城し、自刃した。直純寺（宮崎市瓜生野）に伝わる文書によれば、本丸の城主は権藤平左衛門尉種盛、南城代は権藤八右衛門尉、小城と野首の城代は権藤忠右衛門尉とする。

関ヶ原の戦いののち、宮崎城は高橋元種に返還されたが、元種は一六〇一年から延岡城を築いて新たな本拠を整備しており、落城で大きな被害を受けた宮崎城をどの程度修復したか明らかではない。後述するように石垣や定型的な枡形といった慶長期にふさわしい痕跡が見られないことから、これ以降に最低限の維持はされていたとしても、実質的な城郭として宮崎城が整備されていたのは一六〇〇年の攻城戦までと見てよいだろう。

❸宮崎城からの眺望シミュレーション

宮崎城内の眺望を現実的な可視範囲をシミュレーションしてみよう。[1]その結果を図示してみると宮崎城は南東および南西方面への眺望に特にすぐれたことがわかる（図1）。現在の宮崎市街地を挟んで南二〇kmに位置し上井覚兼の父親・薫兼が居住した紫波州崎城は、宮崎城からの南側可視範囲の限界線上にあり、両城が南北で宮崎平野を押さえる位置になっていたことがわかる。

宮崎城からほぼ真南には、城とそれほど高さが変わらない丘陵がつづくので、現在の総合文化公園から宮崎市役所にかけたラインには見通せない範囲が広がっていた。しかし大淀川の上流に向いた南西方面は川筋に沿って眺望が開けた。大淀川沿いには宮崎城から南西約五kmの位置に倉岡城、そこから南西約四kmに穆佐城、そこから北西約四kmに天ヶ城が位置して、濃密な拠点城郭のネットワークを構成していた。

それら戦国期の宮崎城と同時期に存在した大淀川沿いの拠点城郭群は、いずれも宮崎城から直接望むことが可能であり、もちろん逆に宮崎城を眺めることもできた。烽火による連絡が重要であった戦国期において、互いに確認しあえることは今日考える以上に意味をもったに違いない。

こうした良好な南側への眺望に対して、宮崎城から北側への眺望は近

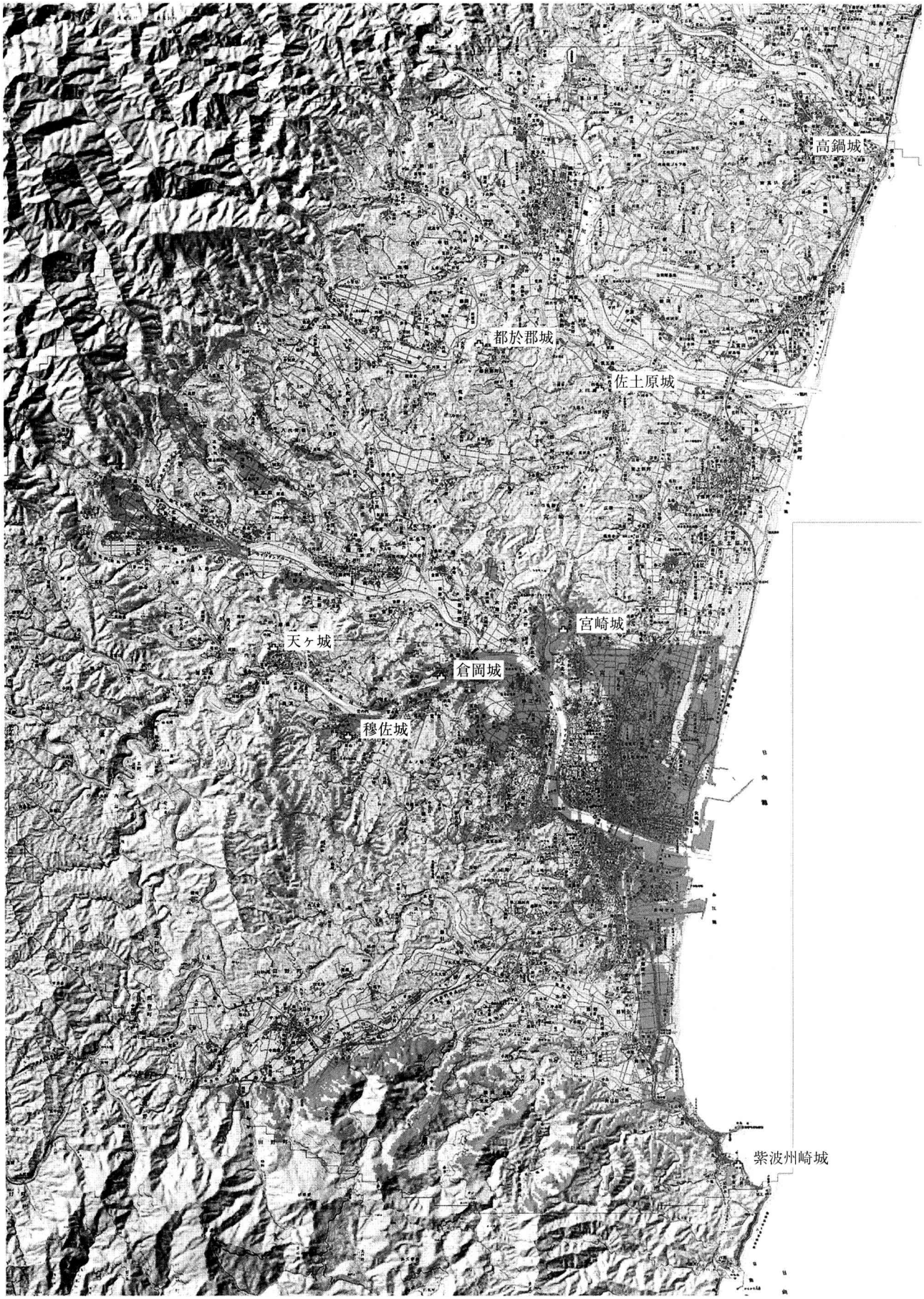


図1　宮城城からの眺望シミュレーション（アミ部分が眺望範囲・ベースマップは国土地理院1/20万地勢図「宮崎」による）

隣一～二km程度のきわめて限られた範囲に留まった。宮崎城が歴史上もっとも重要な役割を果たした上井覚兼時代には、宮崎城は日向国において最上位の拠点城郭であったから、北側への眺望を欠いたのは拠点城郭として問題であった。

しかし宮崎城から北東約九kmには、島津氏当主の義久の末弟・家久が城主を務めた佐土原城があり、信頼できるこの城の存在によって宮崎平野北側の防御線を構成した一ツ瀬川と宮崎城北側の丘陵部を完全に掌握できた。佐土原城との連携によって宮崎城北側の眺望の問題は解決されたのである。

城からの可視範囲の大小や特色は、直接的には城の立地のあり様を示した。しかしどの範囲を見渡せたかは、その城の築城主体の政治的立場や権力の大きさに対応した。だから城を資料として読み解く際に可視範囲の問題は大きな要素になる。宮崎城の立地の特性を政治史的な視点から考えると、北側を見通せない立地は上井覚兼と島津家久との微妙な政治関係を反映したと評価できる。

覚兼は日向国の責任者ではあったが、家久をほかの地頭と同じに扱うことは決してできなかった。家久は当主・義久の名代であり、実質的な権限は覚兼がもっていても名目的には家久が上位者であった。こうした複雑な政治関係が相互に見通せない宮崎城―佐土原城の立地に反映したといえるだろう。

❹宮崎城の構造

(1) 構造の特色

宮崎城は南九州の典型的な中世城郭の形態をとり、複数の曲輪が並立的に連結した構成をとった（図2）。主郭を中心とした求心構造（曲輪間の階層性）が相対的に乏しく、それぞれの曲輪群が屋敷地を基本としたことから、わたくしはこうした城郭を館屋敷型城郭（たてやしきがたじょうかく）と呼んでいる[千田一九九〇・二〇〇〇]。宮崎城は館屋敷型城郭のなかでも宮崎県の都於郡城や、鹿児島県の知覧城・志布志城と並び、もっとも大規模で遺構の保存にすぐれた中世城郭である。

こうした城郭プランのあり方は、シラス土壌という地質によるところもあったが、より主要な形成要因は築城主体の分立的な権力構造を反映したことにあった[千田二〇〇三]。そうした権力構造の特質は城郭プランに色濃く刻印されただけでなく、くり返された会所的儀礼による城主と家臣との信頼関係の構築など日常の細部におよんでいた。発掘調査が進めば、建物構造とともに儀礼を示す遺物の量と分布などから考古学的にも分立的権力の痕跡を浮き彫りにできるだろう。

(2) 主郭

先に述べたように宮崎城は曲輪群のいずれを主郭とすべきか迷うほど並立的なプランをもった。しかし曲輪Ⅰは曲輪群の中央に位置して防御上有利な場所にあったこと、曲輪Ⅲとほぼ等高ではあるが城内中の高所を占めたこと、内部を分割して使用した痕跡がない単郭の広い曲輪であったことから主郭と判断される。『上井覚兼日記』には「内城」の記述があり（天正一一年二月一四日：上巻二〇三）、主郭をさしたものと思われる。当該期は内城と呼ばれたと見て間違いない。直純寺（宮崎市瓜生野）所蔵の文書はこの曲輪を「本丸」とし、『日向地誌』は「椎城」とする。

現状は植林された樹林、草生え地、耕地跡になっており、ごく一部を送電線の鉄塔建設によって破壊されている。周囲に土塁を備えた痕跡は見あたらず、急峻な切岸が囲う。北側の曲輪Ⅲ、南側の曲輪Ⅱに対してはそれぞれ堀切りをめぐらした。特に曲輪Ⅲに面した堀切りの規模は大きい。この堀切り底には現在も東側の谷筋から宮崎城に登る山道が入り

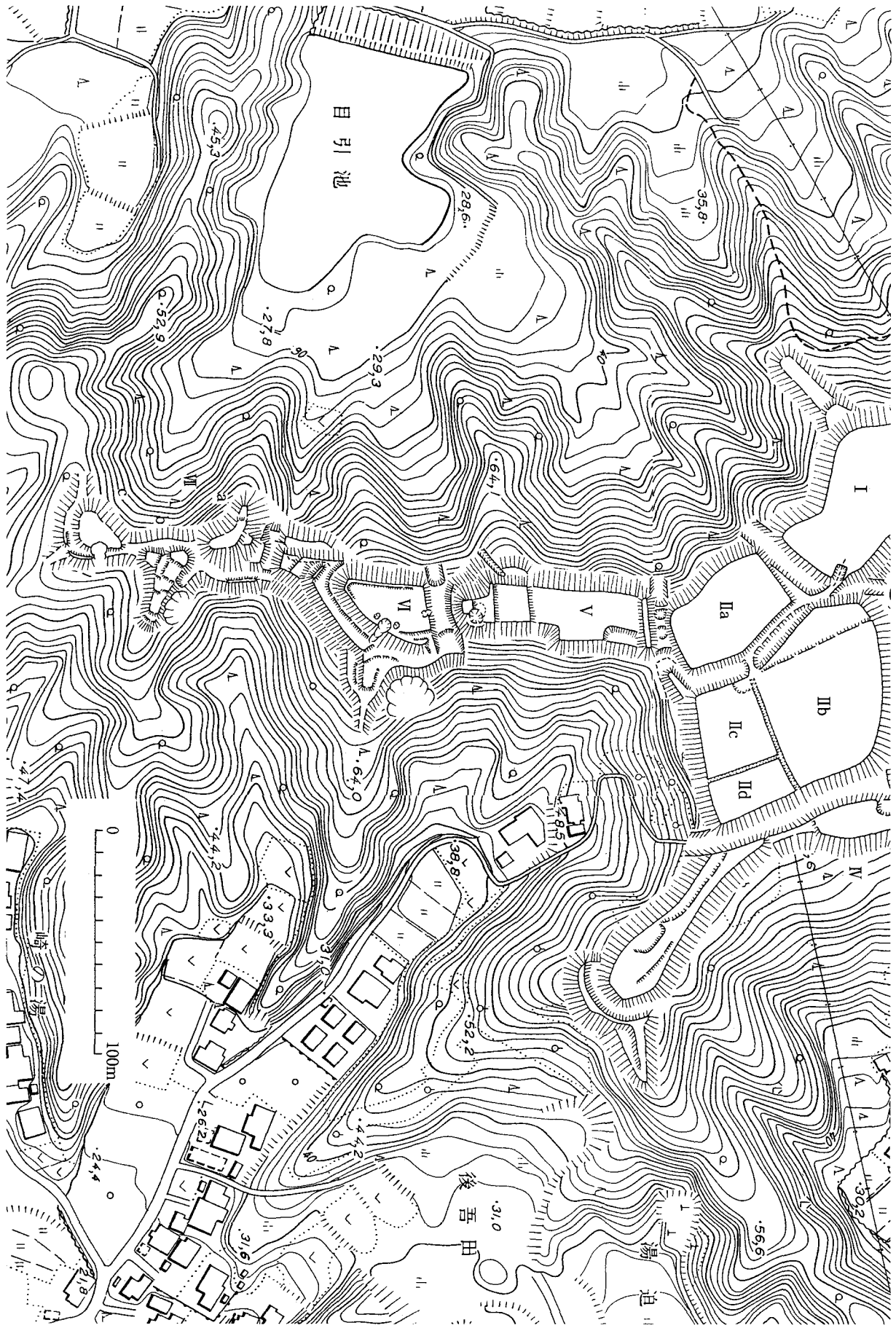
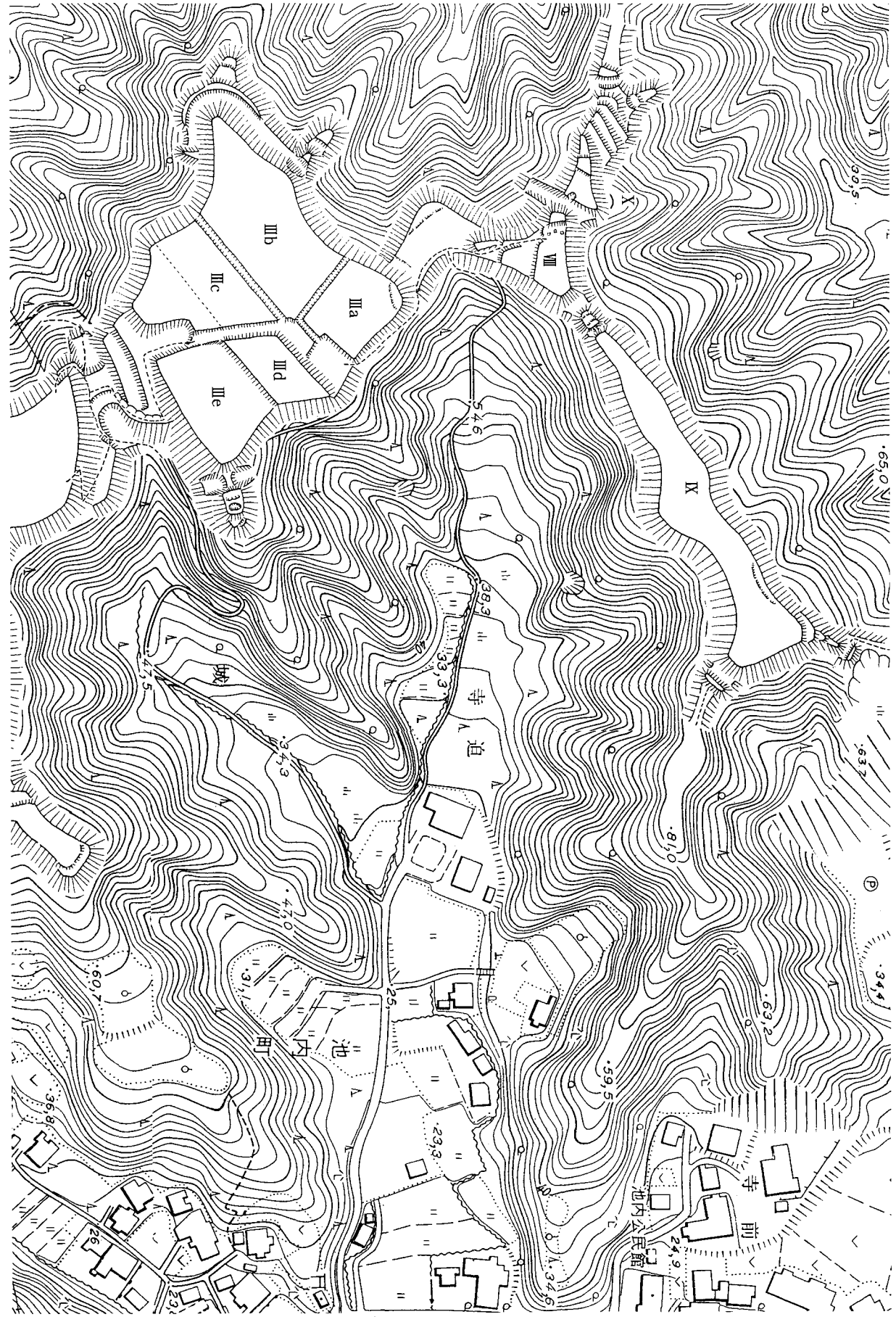


図２　宮崎県宮崎城（千田作図）



込んでおり、こうした城道のあり方は中世にさかのぼると見てよいだろう。

『日向地誌』はこの道を「満願寺口」とし、西側の谷筋の道を「目曳口」とする。『上井覚兼日記』に見える「目曳口」はこれに違いない。現在は地名が伝わらない『上井覚兼日記』の「金丸口」は「満願寺口」であった可能性が高い。

しかし曲輪Ⅲとの間の堀切り底を経由して、本来どのように主郭の曲輪Ⅰに入ったかは地表面観察では明らかにできない。現在は曲輪Ⅰ北東の小さな帯曲輪を通って曲輪Ⅰに入るが、この道筋は鉄塔建設時の新しい改修が加わっており、また切岸の登り方が不自然なところなど、当時の城道とするには不審な点が多い。曲輪Ⅰの北西隅直下にもごく小さな腰曲輪があり、ここをつないで曲輪Ⅰに入った可能性もある。

いずれにせよ曲輪Ⅰの北側塁線周辺には土木工事による枡形など、出入り口を特定する手がかりがなく、地表面からはその特定はできない。それに対して曲輪Ⅰの南側、曲輪Ⅱに面した塁線には、堀底に向けた切り込み状の出入り口が見られる。位置と大きさ、堀底への連絡状況から考えて、これは本来の出入り口であったと判断できる。主郭であった曲輪Ⅰはその位置と役割から考えて、南へも北へも密接に連携するためにそれぞれ城道を伸ばし、曲輪との接点には出入り口を設けていたが、このように北側と南側で出入り口の様相は対照的だった。

曲輪Ⅰの南出入口とその先の城道に関しては、いくつかの復原プランを提示できる。現在、曲輪Ⅱaと曲輪Ⅱb・Ⅱc間とを区分した堀に多数の間伐材が投げ込まれていて、ほとんど堀が埋没して深さを観察できないことが解釈をむずかしくしている。現状では曲輪Ⅰの南出入口から外へ出た城道は、すぐ南側の堀切りを土橋で渡るが、曲輪Ⅱaと曲輪Ⅱb・Ⅱc間とを区分した堀の堀底には降りずに、曲輪Ⅱa側の切岸に沿った部分を進む。しかしここは曲輪Ⅱaの切岸を二次的につけた道で崩してつくった疑いがあり、本来の状況ではないようである。

もちろん曲輪Ⅰの南出入口の前面にあった堀切りを土橋で渡ることは、それだけで見れば何もおかしくない。しかしこの堀切りと、曲輪Ⅱaと曲輪Ⅱb・Ⅱc間とを区分した堀との関係をも考えると、にわかに問題は複雑化する。第1の可能性として、曲輪Ⅰ南側の堀切りと、曲輪Ⅱaと曲輪Ⅱb・Ⅱc間とを区分した堀が同じ深さだったとすると、両方の堀はT状に交わって、曲輪Ⅰを出た城道もそのまま曲輪Ⅱaと曲輪Ⅱb・Ⅱc間とを区分した堀底につづいたと復原できる。すると曲輪Ⅰ南の出入口を出た先は、土橋というより出入り口と堀底とを結ぶスロープ状の通路だったことになる。

第二の可能性として曲輪Ⅰ南側の堀切りの底がより深く、曲輪Ⅱaと、曲輪Ⅱb・Ⅱc間とを区分した堀底が浅かったとすると、曲輪Ⅰの南側出入り口を出た城道は、まず手前の深い堀切りを土橋で渡り、土橋を渡った先でやや浅い曲輪Ⅱaと、曲輪Ⅱb・Ⅱc間とを区分した堀底につながったと復原できる。

ここまで曲輪Ⅱaと曲輪Ⅱb・Ⅱc間とを区分した堀の底を歩いたことを前提として解釈を進めてきたが、堀の中央には曲輪Ⅱaと曲輪Ⅱb・c・dとを結んだ土橋が現状では見える。この土橋も本来のものか、あるいは後世に林業などのためにつくったものか問題が残る。もし本来の姿だとすると堀底を城道にしたと考えることと矛盾する遺構である。わたくしはこの土橋は後世に付加されたもので、本来はなかったと考える。もしこの位置になにかあったとすれば堀底の段差がついていた程度ではないかと推測する。

いずれにせよ曲輪Ⅰから南側への城道をどのように把握するかは、宮崎城中心部の解釈に大きな位置を占め、将来の史跡整備においてもポイントになる部分である。曲輪の平場だけでなく、こうした遺構を発掘調査で確認することで、宮崎城の個性をさらに見いだすことができるに違

いない。

確定できない部分は残るが、曲輪Ⅱaと曲輪Ⅱb・Ⅱc間とを区分した堀を通って、城道はⅡa南直下の外枡形に至ったとするのが、全体から考えてもっとも蓋然性が高い復原である。この一連の出入り口と城道とによってできた構成を外側から中心に向かって叙述すると、まず最初に外枡形という権力表象的で、防御と出撃性の高い出入り口が設定され、そこを通って進むと曲輪群の間を突き抜ける直線的で幅の広い堀底道がつづき、さらにその奥に堀切りで守った切り込み状枡形の主郭(曲輪Ⅰ)出入り口が控えていたのである。

曲輪Ⅱのそれぞれの削平地は後述するように屋敷地であったことが確実で、曲輪Ⅱのなかを通った城道は、城内屋敷の間を抜け、それに見下ろされた直線城道だったと復原できる。主郭の切り込み状の、内枡形を指向した枡形空間と、曲輪Ⅱa南直下に張り出した城道の先端に開かれた外枡形とは、両者の間の城道を挟んで連動した一対の城門であり、これら城道と空間とはひとつづきの虎口空間と評価することができる。

曲輪Ⅰと曲輪Ⅱが連携してできあがった城道と出入り口との組み立ては戦国期の出入り口として達成度が高い。戦国末期におけるこの地域の城郭プランの到達点を示すと考えてよいだろう。このように主郭であった曲輪Ⅰの南北出入り口の違いは、単純に曲輪Ⅰの塁線での出入り口の顕在／不顕在といった問題ではなく、宮崎城中心部の構成に深く連動していた。

つまり曲輪Ⅰの南北の出入り口の差は、南のものが城郭全体の大手の出入り口の機能を担い、北のものが城内の曲輪間の連絡を担った通用門的な機能を果たしたことによる違いと読みとれるのである。ちなみに直純寺の文書は曲輪Ⅱa南直下の外枡形を「大手口」としており、遺構からの評価を補強する。

なお現状では曲輪Ⅱと曲輪Ⅲとの連絡には曲輪Ⅰを経由するほかないが、主郭を通り抜けて曲輪Ⅱと曲輪Ⅲが日常的に連絡していたとは考えにくい。間違いなく曲輪Ⅰの裾をまわって連絡した城道があったものと思われる。曲輪Ⅰの南北にあった堀切り先端部から城道が伸びていた可能性もあり、今後精査をする必要がある。

(3) 曲輪Ⅱ・曲輪Ⅳ

曲輪Ⅱは主郭の曲輪Ⅰ南側に接し、曲輪Ⅲとともに大きな面積をもった。直純寺の文書は曲輪Ⅱ全体を「百貫ショウジ」とし、『日向地誌』は後述する曲輪Ⅱaを「齋藤城」、曲輪Ⅱb・Ⅱc・Ⅱdを「百貫城」とする。近年の宮崎市教育委員会による聞き取り調査でも曲輪Ⅱb・Ⅱc・Ⅱdは「百貫城」と呼ばれていた。

曲輪Ⅱの内部は中央を南北に伸びた堀で東西に大きく二分された。さらに中央の堀の東側の曲輪は小さな区画溝で三つの平坦地に分けられた。曲輪Ⅱb・Ⅱc・Ⅱdである。小さな区画溝は直接には近年まで使用していた畑の境溝であろう。しかし平地城館の堀や土塁、城下町の屋敷区画が近代の地籍図に表され読みとれるように、こうした畑の境溝も戦国時代の曲輪Ⅱの屋敷区画を踏襲した可能性がある。

主郭をとりまいた大きな曲輪群は、後述するように『上井覚兼日記』の記述から「城内衆」の屋敷群として使用したことがわかり、本来も塀や溝で曲輪内部をいくつかに分けていたことが確実である。将来の発掘調査ではそれぞれの建物群と合わせ、区画と屋敷へ出入りした曲輪内の通路とを明らかにすることで、まとまりある屋敷地を把握することが重要である。

曲輪Ⅱのいずれの平坦地にも塁線沿いの土塁は見られない。また出入り口の痕跡もはっきりとしない。ただし曲輪Ⅱa北側の帯曲輪が出入り口のための虎口空間として機能した可能性はある。曲輪Ⅱbは踏査時はきびしいブッシュになっており、充分内部を踏査することはできなかっ

た。堀に面した西側は一段低くなっているが、虎口空間とするには大きすぎる。曲輪Ⅱc北西の堀から上がり込んだところは若干低くなっている。これは後世の土地利用によってできた窪地と考えられる。しかしここも虎口空間であったと捉える余地は残り、注意は必要である。

曲輪Ⅳは曲輪Ⅱの東側に位置し、両者の間には幅十m程の堀切りがある。直純寺の文書は「猿渡」、「馬乗馬場」とする。『日向地誌』には記載がない。またここを「丸城」とする伝承もあるようである。直純寺の文書は曲輪Ⅵを「丸城」としており、重複している。「丸城」を個々の曲輪の名称だとすれば重複は問題であるが、たとえば愛知県尾張部の中世城郭では城域端部の防御に比重をおいた曲輪を「端城」もしくは「羽城」と広く呼んでおり、曲輪の機能に基づいた呼称であったことがわかる。

「丸城」も「端城」に相当した機能に基づいた呼称であったのならば、いくつかの曲輪をそう呼んでいてもおかしくはない。しかし今のところ管見の限りでは「丸城」を機能に基づく呼称として南九州で広く使っていた証拠はなく、記録や伝承の矛盾と理解すべきであろうか。今後なお注意しておきたい。

さて曲輪Ⅳに対しては内側の曲輪Ⅱがより高所にあり、曲輪Ⅳ内を見下ろした。曲輪Ⅱから堀底までは五m程の比高差があり、切岸も急なので防御性はたいへん強かった。曲輪Ⅳは尾根筋が細長く伸びた上につくられており、曲輪そのものも細長く、屋敷地に使ったというより防御機能に主眼をおいた曲輪だと評価される。曲輪面の削平度も曲輪Ⅱと比べるとやや劣っていた。

曲輪Ⅳと曲輪Ⅱが直接連絡したか否かはやはり地表面観察からは明らかではない。曲輪Ⅱにあった屋敷地の間に曲輪Ⅳへとつづく堀切りを越える道が伸びていたと考えることはできる。しかしそれだけでなく曲輪Ⅱの南辺切岸の直下から、曲輪Ⅱ・曲輪Ⅳ間の堀切り底に入り、曲輪Ⅱ北辺切岸直下を通って曲輪Ⅰ東辺切岸直下へとつづく曲輪外縁部の周回路があった可能性が高い。

曲輪Ⅳの北東部と南東部はそれぞれ大きく張り出した。このうち地形が相対的に緩やかな南東部の先端部には堀切りを備えて尾根筋からの侵入に対処していた。この堀切りには比較的明瞭な対岸土塁を見ることができる。

(4) 曲輪Ⅲ

曲輪Ⅲは曲輪Ⅰの北側に位置した大型の曲輪であった。直純寺の文書は「野首城」とし、地元でも同様に呼称している。曲輪の周囲はそれぞれ堀切りを配して防御した。曲輪Ⅲ北側の尾根は曲輪Ⅷにつづく主尾根になっており、現状では明確な堀切りは見あたらない。しかし子細に観察すると曲輪Ⅲの北側塁線の切岸直下が帯状に低くなっており、堀切りが埋没している可能性がある。今後の発掘調査が待たれる。この鞍部に東側から連絡した城道を『日向地誌』は「野首口」とする。『上井覚兼日記』にも「野首口」は見える。

曲輪Ⅲ東側の尾根には現況曲輪面からの比高差一〇m、堀底部での幅八mの堀切りを備えた。堀切りの延長は長い竪堀にしていない。堀切りの対岸側には四角く小規模な曲輪を設けた。この小曲輪は櫓台であったと推測され、曲輪内の窪みは穴蔵状施設の痕跡であった可能性がある。

曲輪Ⅲ西側の尾根には半円形に長く伸びた堀切りを設けた。この周辺の地形が緩やかになっていることへの対処であった。堀切りの外側にはわずかな対岸土塁が見られる。またこの堀切りの北端部ではもうひとつの小さな尾根が張り出していた。そこでここにも対岸土塁を築き、さらにその外側にももうひとつの小さな堀切りを設けて万全の構えをとっていた。

この堀切りを設けた尾根は長く南西に延びたが、曲輪群から遠く離れ

た尾根筋の先に堀切りを設けており（図2の範囲外になり、図示していない）、尾根を伝っての侵入を強く警戒していたことがわかる。

ただしそれらは堀切りの周囲を曲輪化して固めたようすは顕著でなく、また堀切りとしての規模もさほど大きくないので臨時の施設であろう。また二本ある堀切りのうち、より西側の一本は、尾根上の小ピークの東寄り（宮崎城寄り）に設置しており、気になる配置である。宮崎城を守るための配置なら、この小ピークを取り込んだ頂部の西寄りに設置するのが定石である。わざわざ頂部を陣地化できない東寄りに堀切りを入れた意図はうまく説明できない。

しかし宮崎城を攻めた側が築いた施設だと仮定すると、宮崎城中心部につながる尾根筋の頂部のひとつを占拠し、宮崎城側に二重の堀切りを築いて反撃に備えたと解釈することができる。この遺構が臨時施設的な様相を示すこととともうまく一致して整合的である。そうした可能性をもふまえ、今後評価していく必要があるだろう。いずれにせよ曲輪群から遠く離れた堀切りは今のところここしか見つかっていないので、宮崎城周辺の尾根筋を精査して、類似の遺構があるか否かを確認してから最終的な評価をしたい。

曲輪Ⅲの南側の尾根は曲輪Ⅰに接しており、両者の間は自然の鞍部を利用した大きな堀切りになっていた。幅は一八m程にもなる。この堀切りには東西両方向から宮崎城へ登り降りする道が接続しており、当時も同様の状況だったと考えられる。この堀切りに面して二段の帯曲輪があり、帯曲輪の上段は曲輪中央を南北に伸びた通路につながった。この通路は周囲の曲輪面に対して低くなっており、堀底道を継承した。

この曲輪Ⅲの城内道は現況でも明瞭にたどることができ、現在も道として使用されている。この道をたどった北端は東側に折れ曲がって、さらに低くなった四角い窪地になっている。ここは現在行き止まりの窪地であるが、城内道の幅より広くなった矩形のかたちから、もともと出入り口の虎口空間であった可能性が高い。城内道よりも一段低くなっていたことも虎口空間だったとすれば合理的である。宮崎城の中心曲輪群の北側関門にふさわしい整った出入り口といえる。

この出入り口は城道の折れと空間を組み合わせた出入り口と解析でき、定型化したものではないが内枡形と評価される。先に見た南側の中心曲輪群の出入り口（曲輪Ⅱa切岸直下）が外枡形であったことと一対と意識して北側の中心曲輪群の出入り口を内枡形にしたと評価できる。宮崎城のプランが高度な一貫性を備えたことを示す。

曲輪Ⅲの内部は溝と段差で五つに区分され、それぞれ本来は屋敷地として使用したものと思われる。曲輪Ⅱでも述べたように、曲輪内に見える溝は、直接には耕地や林の所有者境を示すにすぎないが、ある区画が地割りとして残り、それが長期間継承されて地籍図に反映したように、こうした溝はもともとの屋敷地境を継承した可能性が高い。

Ⅲaは北端部を占めた屋敷地で、Ⅲbとは溝で分けられた。Ⅲbは曲輪Ⅲの中でもっとも大きな面積をもった。Ⅲcは南西部分の屋敷地で現況では北半部が竹林に、南半部が草生地になっていることから、こうした植生の差も所有者の違いに起因しているのであれば、もともとの屋敷地に起因した歴史性を表層で示す手がかりであるかもしれない。

Ⅲd・Ⅲeは曲輪Ⅲの中央を南北に伸びた城内道の東側に位置し、Ⅲdが一段高い。Ⅲeの東側には小さな尾根が伸びており、先述のように堀切りを設けて防備に万全を期した。

(5) 曲輪Ⅴ

曲輪Ⅴは曲輪Ⅱの南方主尾根に位置した曲輪である。直純寺の文書は「彦衛門城」とし、『日向地誌』は「彦右衛門城」とする。曲輪Ⅱとの間には幅一〇m程の堀切りを設けて分断した。この堀底には明瞭な仕切土塁を見ることができる。仕切土塁の存在から、堀底を通路として使用

しなかったことは確実である。しかしどうしてこの堀切りだけが仕切土塁を備えたのであろうか。

この堀切りは東側の外枡形に向かって城道面よりも高い位置で開口しており、そうした位置関係から、外枡形の虎口空間に対した武者隠しとして機能したと解釈できる。この解釈が正しければ、仕切は堀底を塹壕状の施設とするために設けたことになり、整合的に説明可能である。

曲輪Ⅴはこの北側の堀切りに対して土塁を備えた。出入り口になりそうな開口部はこの土塁にはまったく見あたらない。この点も先に見たように、堀切りが通路として使用されなかったと考えたこととうまく整合する。地表面観察では土塁に石塔の石材が混じることから、表面を石張りして補強していた可能性がある。また瓦が散布していることから、何らかの瓦葺きの建物が存在していたことが予測される。

この曲輪Ⅴへの出入り口は曲輪東側の一段低くなった窪地状の小空間であったと思われる。窪地状の小空間が枡形としての役割を果たしたのであろう。曲輪面の削平はよく整っており、中心曲輪群からは外れたが、それに次ぐ位置づけであったことがわかる。曲輪Ⅴは南側に二つの段をもっていてしだいに高くなっていた。そしてその先端は櫓台になっており、南側の巨大な堀切りを見下ろした。

この堀切りは対岸の曲輪Ⅵまで幅一五m、堀底までの比高差一〇mを測り、宮崎城内でも最大規模の堀切りであった。突出した櫓台は今でこそ植林によって見通しを妨げられているが、圧倒的な存在感があり、堀切りと合わせて南側尾根の防御拠点であった。櫓台周辺には瓦の散布が認められ、どうやら瓦葺きの櫓があったとわかる。

この櫓台の東脇には地下道につづく大土坑が開口している。掘削にあたって廃土を周囲や東側斜面に投棄した様相も生々しい。この遺構は宮崎城時代のものではなく、第二次世界大戦末期に日向灘へのアメリカ軍の上陸に備えた日本軍陣地の痕跡であるらしい。地下道は地中にかなり伸びているようだが、開口部からは奥をうかがうことはできない。しかしこの大土坑はすでに櫓台の東端部を破壊しただけでなく、しだいに遺構に深刻な被害を与えており、遺構の滅失を防ぐ緊急対策が必要である。曲輪Ⅴの西側斜面には小さな帯曲輪と竪堀がある。これらは一応、竪堀と帯曲輪と判断しておくが、先述した大土坑と関連した施設の痕跡かもしれない。

(6) 曲輪Ⅵ

この曲輪Ⅵは曲輪Ⅴのさらに南の主尾根上に位置した。直純寺の文書は「丸城」とする。北側は曲輪Ⅴとの間の大堀切りに接しており、堀底との比高差は五m程を測る。つまり曲輪Ⅴの南端櫓台からは五m程標高が低く曲輪Ⅵは見下ろされた。曲輪Ⅵには北側の大堀切りから直登する道があるが、本来のものではない。この道は切岸と曲輪面を切り崩しており、遺構保存のためには望ましくない。

本来の出入り口は曲輪Ⅵの東側にあり、曲輪内に溝状に一段低くなった城道が確認できる。曲輪Ⅵの北東端からスロープを登って曲輪内に入り、南側に折れ曲がって通路を進んだ出入り口プランで、織豊系城郭の定形化したものではないが、よくくふうした戦国末期にふさわしい出入り口である。この出入り口は曲輪Ⅵ切岸下の東側から南側へとつづいた帯曲輪に連結した。この帯曲輪は城道として機能しており、北側へもこの帯曲輪から堀底に降りて宮崎城中心部へと城道が伸びたのだろう。

曲輪Ⅵの西側から南側の塁線にはわずかに土塁を認めることができる。決して大きなものではなく、痕跡程度である。もともと小規模な土塁であったのか、開墾などによる二次的な影響のため小さくなったのか、いずれの可能性もあり得るが、どうやらもともと大きな土塁があったというわけではなさそうである。

この曲輪の東側塁線の中程にも大きな土坑が開口している。単純な穴

ではなく、地中に向かってトンネルが伸びていく点も、先に見た曲輪Ⅴの南端に見られた大土坑と共通する。同様のものは曲輪Ⅶｃの東斜面にもある。すべて第二次世界大戦末期の日本軍による地下施設跡と見てよい。

これらは周辺の宮崎城の遺構を破壊し、さらに先に指摘したように現在でも遺構に悪い影響を与えている。また地下に伸びたトンネルが崩壊すれば、宮崎城の遺構に甚大な被害を与えることになるだろう。雨水などがそのまま流れ込んでいるので、地下トンネル（あるいはその奥の地下室）の傷みは進んでいるものと思われる。

そしてなにより突然巨大な垂直坑が開口しているので、ひじょうに危険である。宮崎城の遺構破壊の進行をくい止め、転落事故を防ぐために、穴をふさぐなどの対策が至急必要だろう。ただし近年では第二次世界大戦時の軍事施設を研究する「戦跡考古学」が活発になっており、学界でも一定の評価を得ている。この巨大な大土坑と地下道を文化財として位置づけることも考慮しつつ、しかし第一義には宮崎城の遺構保存を優先して適切な保護をすべきである。

曲輪Ⅵの南側切岸のはるか下には東側から回り込んできた帯曲輪があり、尾根部分には土塁を備えて堀切りと出入り口との機能を兼用していた。この周囲は雑木林と竹林が混じってきびしい状況だが、いくつかの小規模段が尾根にあり、それをつないでさらに南の堀切へと城道が伸びた。

(7) 曲輪Ⅶ

曲輪Ⅵ南側尾根の小規模段に接した堀切りを超えた先に、三つ曲輪群のまとまりがあった。北側から曲輪Ⅶａ、曲輪Ⅶｂ、曲輪Ⅶｃとする。これらの曲輪はいずれも曲輪Ⅵまでの曲輪のつくり方と異なり、曲輪面の削平は充分でなく、切岸も不全な部分を残した。臨時・仮設的な曲輪群と判断できる。

曲輪Ⅶａは三段の曲輪により構成したこの曲輪群の東側に堀底から回り込みながら南へとつづく城道があり、この城道はゆるやかな坂道となって主尾根の鞍部にとりついた。この鞍部の南に位置したのが曲輪Ⅶｂで、東に向けて粗雑な段差を数段もった。主尾根にとりついた城道は曲輪Ⅶｂの西側を南に向かって伸びた。

この辺りでは山中とは思えない程道幅があり、道部分も鮮明である。中世の宮崎城の城道がその後も継承され、近代まで道として使用されたとしても相対的にできすぎで、先に指摘した第二次世界大戦末期の日本軍による地下施設構築に伴って道筋にも改修を加えていた可能性が高い。

曲輪Ⅶｃは宮崎城で確認できる遺構の南端を占めた。東側から南側にかけて城道がとりまきながらつづいた。城道の外側には対岸土塁があり、ここでは道筋が堀状になった。防御にも効果があっただろう。曲輪面の削平は不充分で、曲輪側には土塁などの痕跡は認められない。

曲輪Ⅶｃから南の主尾根の踏査も行ったが、これ以上の堀切りはなかった。宮崎城の遺構は曲輪Ⅶｃを南限と判断できる。しかし主尾根上のかなり離れたところで時期不明の削平段があった。直接宮崎城を構成した遺構とはできないが、屋敷地など関連施設の痕跡であった可能性は残る。将来の発掘調査を待ちたい。そして宮崎城の歴史的景観を守るためには曲輪Ⅶｃより南側の尾根筋をバッファーゾーンとして保全していく必要があることを指摘しておく。

(8) 曲輪Ⅷ

曲輪Ⅷは曲輪Ⅲの北側に位置した。寺迫からの城道（「野首口」）が上がってくる南側の尾根鞍部に向けた三段の曲輪から構成された。直純寺の文書には曲輪名の記載がなく、『日向地誌』は「服部城」とする。曲輪Ⅷを経由して東側の曲輪Ⅸ、西側の曲輪Ⅹに連絡し、北端の曲輪群で

は要の役割を果たした。現状は除木された草生え地になっており、心地よい空間になっている。南側の尾根鞍部から最上段の曲輪に向けて道がついている。新しい整備の手も入っているが、基本的にはもとの城道を踏襲したと考えてよい。

最上段の曲輪の西側には幅広の土塁があり、空堀を挟んで曲輪Ⅹと対峙した。この土塁は土壇上になっており櫓の存在を推測させる。堀切りは深く尾根筋の侵入を防ぐのに充分な効果を発揮した。堀切りを挟んだ曲輪Ⅹ側には堀切り底から切岸を直接登る窪地状の道筋がついているが、現在まで使用しているので壁面は新しい崩落断面になっている。

曲輪Ⅷから曲輪Ⅹへどのように連絡したかは地表面観察でははっきりしない。現状の道筋はやや不自然であるだけでなく、曲輪Ⅷの最上段の曲輪から曲輪Ⅹ側へ出入りした出入り口の痕跡は認められなかった。この点は曲輪Ⅸへの出入り口が見あたらないことと共通しており、曲輪Ⅷ最上段からは直接、曲輪Ⅸおよび曲輪Ⅹには連絡しなかった可能性が高い。そうすると曲輪Ⅷの中断あるいは下段の曲輪面から脇の切岸を伝って連絡したか、下段の曲輪の切岸下をそれぞれに連絡した道筋があったかのいずれかとしか考えられない。そうした視点からなお慎重に踏査して確定する必要がある。

曲輪Ⅷと曲輪Ⅸとの間には二重の堀切りを設けていた。曲輪Ⅷに近い西側の堀切りは深く切岸も急になっていて強力な遮断線になった。曲輪Ⅸに近い東側の堀切りは浅く小規模だった。中央に土橋があり、二本の堀切りの間にある小曲輪につながっていた。東側の堀切りに沿って土塁を備えていた。小曲輪の防御のためというより東側堀切りの対岸土塁と思われる。曲輪面は西に向かって傾斜した。

小曲輪の機能は形態からは特定できないが、虎口空間的な役割を果たしたと考えられる。現状では曲輪Ⅷ・Ⅸ間の接続は明らかでないが、この小曲輪を経由して曲輪Ⅸに出入りした蓋然性が高い。東側の小さな堀切りは古い時期の空堀が残ったものと評価することもできるが、虎口空間を曲輪Ⅸ本体から分離するためにも有効であった。

(9) 曲輪Ⅸ

この曲輪は宮崎城の北東部に長さ一三〇m程にわたって伸びた長大な曲輪であった。果樹園や畑として近年まで使用していたが、現在は全体的にブッシュに移行しつつある。直純寺の文書によれば「射場城」とする。現在でも地元では「射場城」と呼ぶ。長大な形態故だろう削平は良好で、地表面から曲輪内に大きな段差や溝状の痕跡は見あたらない。曲輪Ⅸの北東端部は北と南東に二股に分かれて尾根がつづいた。

北側の尾根に対しては三段ほどの小曲輪を重ね、堀切りを設けた。堀切りには明瞭な対岸土塁が認められる。堀切りの端部は竪堀として伸ばしておらず、西側の堀底開口部から尾根を伝って山麓に至る道が伸びた。本来もこうして城道を設定していたと考えてよい。ただし曲輪面から堀切り底へははっきりとした出入り口を確認できない。そのためルートとしてはあっても主要な城道とすることはできない。

この曲輪Ⅸ北東部の北側尾根の堀切りには早急な保全と修景措置が必要である。堀切りが残ったことは幸いであったが、北東山麓の病院建設に伴って堀切りの対岸土塁際まで尾根が大きく削られ、地形が一変している。削土した斜面は安全勾配をとるとはいえ、立木が伐採されており好ましい状況ではない。表土の流失等によって土塁と堀切りに影響が出る可能性がある。この堀切りは宮崎城の北東端を限る遺構であり、確実に保存することが望ましい。

曲輪Ⅸ南東の尾根にも堀切りを設けた。曲輪面から堀底までの比高差は四mを測る。切岸は急斜面を保ち、堀切りの対岸には比高差を増すための対岸土塁を備えた。堀切りの先はなだらかな尾根がつづくが、この堀切りまでを狭義の城内と判断できる。

長大な曲輪Ⅸはどのように使用されたのだろうか。まず考えられるのが防御機能の比重が高く惣構え的な役割をもち、臨時の人員・物資の収容空間であった可能性である。また別の可能性として城内主要部の屋敷よりも階層の低い層の屋敷地を想定することができる。この点についても今後の発掘調査に期待したい。

(10) 曲輪Ⅹ

この曲輪は宮崎城の北西端に位置した。堀切りを挟んだ曲輪Ⅷからは見下ろされた。東側の堀切りに面した曲輪の削平は整っており、この曲輪から北西に向けた四段の帯曲輪があった。東に主尾根が伸びており、これに対しては堀切りを備えて遮断した。堀切りの外側には対岸土塁が認められる。また主尾根のほかに北に向かって小さな尾根が伸びたが、ここには二段の曲輪をつくっていた。

曲輪Ⅹは城外に向けた尾根上に小規模な曲輪を連ね、曲輪の段差による切岸を重ねたことで城内への侵入を阻止しようとしたことがわかる。防御を強く意識した曲輪群であり、卵の殻のように外周部から中心部の屋敷地を守っていた。しかし城域南端の曲輪Ⅴ・Ⅵの圧倒的な防御の組み立てと比較すると、北方を防御正面と意識していなかったことが明らかである。そうした遺構の特色は、最初に検討した宮崎城の立地と政治的な城郭の配置関係の評価とみごとに一致する。

❺『上井覚兼日記』に見る宮崎城

(1) 城内の武家屋敷

『上井覚兼日記』には宮崎城に関連する記述が豊富にあり、ほかの戦国期城郭ではふつう知ることができない細かな城内のようすをつかむことができる。ここでは日記をもとに宮崎城内の構造を検討する。

宮崎城の遺構には屋敷地と思われる多数の曲輪が確認できる。『上井覚兼日記』にも遺構に対応した記述を見つけることができる。たとえば「城内之衆廿人計ニ三献参会候」とあり（天正一三年正月：中巻一六二）、覚兼のほかに城内に屋敷をもった最上級家臣の城内之衆は二〇人ほどであり、少なくとも二〇軒の武家屋敷が城内にあったことがわかる。城内之衆のうち氏名が判明するのは、覚兼の三番目の弟で鎌田氏の養子となった鎌田源左衛門尉、関右京亮、柏原有閑の三名である［桑波田一九五八］。

城内之衆は衆中内での格式が高く、毎年正月の覚兼との正式対面においてもやはり「城内之衆計ニ三献参会候」とあり酒三杯と肴三種の正式な饗宴であったが、「其余ハ肴一種にて御酒参会申候」と酒一杯に肴一種の簡略の饗宴となって格差があった（天正一二年正月：中巻二）。料理については景色などをかたどって盛りつけした「押物」があったことがわかり（天正一一年正月：上巻一八九）、正月にふさわしい。

城内之衆は覚兼よりも上位者への使者を務め、覚兼に代わって来訪者を謁見・面談するなど、城主である地頭の覚兼の政務を補佐した。軍事面でも中核的な役割を果たしており、格式に見合った重い役目を負った。この城内衆と対比され、「其余」とされたのが「麓之衆」であった。城内ではなく宮崎城の山麓にそれぞれ屋敷を構えたものと思われる。地形から考えて宮崎城の周囲の谷筋に麓之衆の屋敷があったと推測できる。

もちろん山麓の屋敷群がどの程度凝集していたのか、ということは現在のところ判断する手がかりがない。しかし覚兼の帰城に合わせて衆中がすみやかに集まっているようすから判断すると、ある程度高い凝集度であったと見てよい。山麓部には惣構えに相当した施設は見あたらず、麓之衆の居住した城下の凝集域を外郭とすることは、この段階では実現できていなかった。

上井覚兼がまとめた日向衆の武士たちは島津氏直参で覚兼のもとに編

成された衆中と、覚兼に仕えいわゆる陪臣にあたった内衆の「悴者（かせもの）」とがあった。悴者として確認できるのは上井玄蕃助と上井神次、加治木駿河守、加治木伊与介、安楽阿波介である［桑波田一九五八］。悴者は覚兼に近侍して親衛隊的な役割を負っており、職務から覚兼の館に近接して屋敷をもった可能性がある。

近年の調査で織田信長が居城にした愛知県小牧城山麓の信長の館に近接した屋敷群が検出されているが［中嶋ほか二〇〇三］、これら屋敷群は信長の親衛隊の屋敷群と見て間違いない。また愛媛県湯築城の調査では河野氏の居館がある曲輪内に館に近接した一群の屋敷群を検出しており［中野ほか二〇〇二］、これも大名の直属家臣である親衛隊の集住の実態を示す資料である。いずれも大名の館に近くにあってさほど大きくない屋敷群という特徴をもった。

こうした各地の城郭の様相から考えて、宮崎城内でも城内衆の屋敷よりも小規模ではあっても覚兼の館に近接して設けられた悴者の屋敷があった可能性がある。ただしすべての悴者の屋敷が城内にあったのではないだろう。また基本的に悴者の屋敷は山麓にあり、主郭にあった覚兼の館に出仕して、交代しながら詰めていた可能性もある。いずれにせよどのような屋敷群が発掘で検出されるのか、期待して待ちたい。

さらに宮崎城の日常の警備がどうなっていたかも重要な問題である。島津氏の本拠鹿児島は各地の衆中が組み合わされて輪番で警護を務めていた。こうしたことから宮崎城も宮崎衆中がいくつかの番を組んで輪番の守備をしていたことが考えられる。すると宮崎城内には単純に個々の屋敷地が集まっただけでなく、在番のための詰所が要所にあったはずである。おそらく防御の拠点になる出入り口や櫓の周囲を中心に詰所を配置していたのであろう。

(2) 主郭御殿

主郭には上井覚兼の御殿があり、政庁と居所として機能した。ここでは先に引用したように正月をはじめとして正式の対面を行っており、主殿に相当した建物があったことがわかる。しかし正式ではあっても形式的な対面ばかりではなく、室町・戦国期の権力には不可欠であった城主と家臣達との人格的で親密な人間関係の構築に覚兼も腐心していた。

覚兼は僧や城内之衆、悴者などと将棋や碁、双六、茶湯、蹴鞠を楽しみ、『太平記』などの戦記を若衆達に読み聞かせていた。若衆達も「終日」覚兼のもとを訪ねていて、覚兼を慕っていたようすがうかがわれる（天正一三年五月：中巻二二九―二三〇など）。また覚兼は親しい僧や城内之衆、悴者を招いて「月次連歌」を「愚亭」にて開催していた（天正一三年六月：中巻二三二）。

こうした身分の上下を前面に押し出さずに人格的で親密な人間関係を築き、またさまざまな身分の人びとが集まって文芸活動を行うにふさわしい建物は会所空間であった。主殿とは別棟の会所空間を覚兼の主郭御殿が備えたことは確実である。

(3) 主郭の庭園と茶湯之座

そしてこの会所空間に隣接して庭園を設けたことも日記からわかる。天正一一年閏正月には庭づくりの記述が集中している（上巻：一九二―一九三）。「庭ニ樹なと植させ、石なとつかハせ申候也」（三日）、「庭前ニ木なとあまた栽させ候て見申候」（四日）、「又樹なと種ゑ作候て慰候」（五日）とあるのがそれで、山城であることから庭園は枯山水だったと思われる。庭園はその後も手を入れて整備に努めたようで、天正一三年には「庭ニかかりの松なと植させ候」（正月一七日：中巻一六八）、「懸之木栽させ見申候」（同一八日：中巻一六八）とある。

会所機能を補完し、近世に向かって会所機能を継承したものとして

[前川二〇〇二]、茶室は当該期の城館を考える上で重要な位置を占める。茶室に関しては天正一一年四月に吉日だというので「茶湯之座可構普請等させ」と見え（一九日：上巻二三〇）、さらに「茶湯座作候する覚悟之処ニ樹なとさせ候」（同月二一日：上巻二三〇）、「茶湯之座普請させ候て見申候」とつづいた（同月二二日：上巻二三〇）。

翌月には「此日より茶湯座造作企候、諸細工共させ候て見申候」とあることから内装の細工をはじめたことが判明する（五月一三日：上巻二三六）。茶室まわりは天正一三年に庭に手を入れたときにも整備を進めており、庭に「かかりの松」を植えたのにつづいて「茶湯之座見越ニ常磐木なと栽させ候て見申候也」（正月十七日：中巻一六八）とある。

一五八三年（天正一一）の日記だけで七五回にもおよぶ茶会の記事があり、このうち宮崎城内では三七回の茶会が開かれていた。いかに茶湯が流行していたかがよくわかる。覚兼もよい茶道具を収集することに努めており、道具を鑑定してもらったり、あるいは自慢の道具を見せたりしている。城が遺跡化すると多くの茶道具は持ち出され、廃棄されたものも土中で滅失するもが少なくないが、それでも中世の城跡から天目碗などが数多く出土する背景をこうした茶湯の隆盛はよく物語る。

(3) 主郭の風呂

これら御殿の主要建物に加え、主郭に建っていたことが判明するのは風呂である。天正一一正月に「風呂造作打立候也」とあり（三〇日：上巻一九一）、同年閏正月には「此日ハ風呂建させ候とて、終日普請させ候也」と記していた（一八日：上巻一九六）。日記の中にはしばしば風呂を焚かせた記述がある。しかし風呂を焚いたのは純粋に体を清めるためだけではなく、対面や饗宴の一環として風呂に家臣や来訪者を入らせ、また覚兼自身も寺社などを訪問した際に、対面や接待の一環として風呂によばれていた。

こうした風呂をめぐる様相からは風呂をもつ者が限られたことを示しており、戦国期の武士のくらしを考える上で興味深い。戦国期の城館内の風呂の発掘例には、吉川氏に関連した広島県の万徳院跡があり、現地には風呂を原寸大で立体復原している。これはいわゆる蒸し風呂型式であったが、宮崎城の主郭にあった風呂も同様のものと考えられる。

復原された万徳院の風呂に入った人によれば、蒸気と木の香りが渾然となってすばらしい癒し効果があるという。宮崎城ではすべてではないにせよ風呂を焚いた日や入った人がわかる希有な事例であり、発掘調査によって遺構が確認されることを心待ちにしたい。

(4) 主郭の毘沙門堂

主郭内にあった宗教施設が毘沙門堂であった。この毘沙門堂は茶室と同じ天正十一年四月十九日が吉日ということで工事をはじめ、同月二三日条に覚兼が工事を監督した記事が見え、翌五月三日条に毘沙門像を奉安したことを記すので（上巻二三四）、半月あまりで完成したことがわかる。覚兼は後述するようにさまざまな神仏を信仰したが、とりわけ毘沙門天への信仰は厚かった。毘沙門堂完成直後の五月六日には「毘沙門堂ニ茶湯仕懸、衆中なとあまた寄合、終日慰候也」とあり、完成のお披露目をしている（上巻二三五）。

(5) 主郭の工房

主郭内には御殿があっただけでなく、工房を併設していた可能性がある。たとえば「恒如、此日も番匠、金細工、刀鞘細工、塗物師なと、種ゝさせ候て見申候、鉄放台就中拙者見候て、申付候也」といった記述があり（天正一一年六月一四日：上巻二四八）、覚兼に直属した職人の工房が御殿に近接して主郭もしくは城内にあったとしか考えられない。青森県の根城ではそうした主郭内の工房が発掘で判明しており、宮崎城で

も同様の様相を想定すべきだと思われる。

(6) 主郭の建物配置

主郭内の主要建物群の配置関係をうかがわせるのが天正一一年二月一四日の記述で、主郭に比定できる「内城」に招いた賓客とまず「御礼茶」があり、ついで「御めし」となった。時間がたってから場所を移して「奥座」にて押物と思われる「押肴にて御酒」となり、最後はさらに場所を移して「茶湯之座にて点心参候て、御酒数篇参候、御茶勿論候」となった（上巻：二〇三―二〇四）。

おそらく最初の「御礼茶」と「御めし」が主殿空間での正式な対面と饗宴であり、「奥座」での「押肴にて御酒」が「内々懸御目」とある様相からも会所空間での内的な饗宴と位置づけられる。こうした主殿と会所とを使い分けた室町期の武家儀礼に則った対面と饗宴に、茶室でのさらに親密で個人的な饗宴が加わったのであった。

儀礼の進行につれてそれぞれの建物や部屋を使い分けており、移動もスムーズだったことがわかる。これらから主殿空間、会所空間、茶室といった建物群を廊下で結んだ御殿群を想定することができる。会所空間は「奥座」とあるように、御殿群の中では内向きにあったこと、おそらく会所空間と茶室は近接しただろうことが推測できる。覚兼は立花の名人であり、会所空間や茶室は室礼に則ってみごとに飾り付けられていたに違いない。

(7) 弓場

武士にとって武芸の鍛錬を怠ることはできなかった。『上井覚兼日記』には宮崎城の弓場が登場した。たとえば「弓場普請各衆へさせ申候也」（天正一一年五月八日：上巻二三五）とあるのをはじめに、「朝普請ニ、坪弓場誘させ候也（中略）拙者手之衆共、坪弓場にて弓之事仕候、見申慰候」とある（同月一〇日：上巻二三六）。さらに普請の記述は翌一一日にも見え、その翌日である一二日と一八日には、体調を崩していた覚兼は乗物に乗って麓に下り、弓場普請の進捗状況を確認した（天正一一年五月一二日および一八日：上巻二三六・二三七）。

この記述から弓場は山麓にあったことが確認できる。そして同年六月一四日の記述には「暮候て弓場より帰候也」とあり（上巻二五〇）、弓場が主郭へ登っていく城道の道筋のそばに位置したことがうかがえる。そして同年六月二五日の記述には「目曳口弓場」と見えるから（上巻二五四）、この弓場は宮崎城西側の山麓に位置したことが確定する。目曳口は宮崎城主郭の北側堀切りに到達した城道であり、六月一四日の記述ともよく符合する。山麓部で弓場の痕跡を探す踏査は行っていないが、何らかの遺構を確認できる可能性がある。

(8) 草払い

春から夏にかけては草木が茂る。宮崎城のような山城では草払いはたいへんな問題であったに違いない。特に塁線周辺は見通しをよくし、鉄砲や矢が通るようにしていたから、草もよく生えたに違いない。草が茂ることは迷惑なことばかりではなく、切岸の土砂流失を防ぐことでもあったから、適切に管理することが重要であった。天正一三年七月には「城之草払させ候て見申候、岸切せ候処も候」とあり、翌日も「此日も草払い、昨日一日にハ不事成候間」と二日がかりで除草をしていた（一八日・一九日：中巻二四七）。

除草をして曲輪の切岸の状況が明らかになることで、防御上の弱点や塁線の傷みも点検できたようで、部分的に切岸を整えたことが記述からわかる。

(9) 道の整備

宮崎城の南西の大淀川北岸に位置した柏田は、宮崎城にとって大淀川の水運を押さえた軍事的、経済的に重要な拠点であった。覚兼も柏田まで船を用いて騎乗することもしばしばあった。そこで城と柏田との間に新たな道をつくって整備し、連絡を速やかにしていた（天正一一年閏正月二一日・二七日：上巻一九六・一九八）。

(10) 犬馬場

『上井覚兼日記』には犬追物の記述も多い。日記の中では宮崎城下での犬追物の開催は確認できないが、『伊勢守心得書』は覚兼が犬追物の参仕を固辞して島津義久の不興をこうむったことを記した。犬追物は武家儀礼として重要であるばかりでなく、家臣の務めでもあった。

宮崎城の西側の谷筋に現在でも犬馬場の通称地名があり、宮崎城が犬馬場を備えたことがわかる。第二次世界大戦の直後にアメリカ軍が撮影した航空写真の実体視を行ったが、馬場の痕跡は確認できなかった。犬馬場の位置は、柏田の北で岩戸社の西側あたりの河原であったらしい。

❻上井覚兼と信仰

上井覚兼は宮崎城を拠点に地頭として日向国の経営に努め、島津氏老中として鹿児島の会議に出席した。そして日向衆を率いて島津氏が進めた九州統一の戦いに連年出陣する多忙な年月を送っていた。しかし覚兼はこれほど多忙な日々の中で、驚くほどの時間を信仰に割き、さまざまな神や仏に信心を捧げていた。こうした上井覚兼の信仰を玉山成元の研究によって概観する［玉山一九六九］。

『上井覚兼日記』は今日までに失われた部分も少なくなく、年間を通して覚兼の活動を知ることができるのは一五八三年（天正一一）～一五八六年（天正一四）の四年間に限られた。覚兼の三九歳から四二歳にあたっておりまさに働き盛りといえる歳だが、この頃すでに覚兼は体調を崩しはじめており、四五歳で亡くなったことからいえば晩年の日記ともいえる。さて、玉山が日記から信仰関係の記事を抽出したごとく、規則正しく覚兼は信心を捧げていた。

宮崎城で政務を執っていた期間で見ると、たとえば天正一一年閏正月では二九日間のうち一三日間に何らかの宗教活動の記述があり、同年四月では二九日間のうち一八日間も読経や看経、祈念などをしていた。日にちとの関係で見ると、おおむね毎月一日と一五日は読経・看経を行っていた。覚兼が法華経を持経していたことから、読んだのは「法華経」と推測されている。

また覚兼は先に見たごとく一五八三年に宮崎城内に毘沙門堂を建てたように、四天王の随一で北方の守護神であった毘沙門天を深く信仰していた。毎月三日には宮崎城にいればもちろんのこと城内毘沙門堂の毘沙門天に参詣し、出陣中であってもほとんど欠かさずにおそらく「法華経」を読誦していた。

そして毎月八日と一二日は病気平癒に功徳がある薬師如来への参詣、一八日は衆生が救済を求めるとすぐに救ってくれる観音菩薩への祈念、二三日は三尺虫が上帝に罪を奏上するのを防ぐ月待ち（庚申待ち）で読経を行い、二四日は衆生を救済し、また戦を勝利させる地蔵菩薩への祈念、二五日は学問の神様である天神への祈念と連歌会、二八日は竈の神である荒神への祈念を行い、また覚兼の信仰が篤かった折生迫の御崎観音の僧を宮崎城に招いて講読を受けていた。

こうしたさまざまな神仏への読誦や祈念に加え、覚兼は宮崎城周辺の寺社へしばしば参詣した。富永嘉久によれば、西方院（宮崎市瓜生野）に四七回、満願寺（宮崎市池内町）に四三回、御崎観音（宮崎市折生迫）に三七回、伊勢社（宮崎市加江田）に三一回、曽山寺（宮崎市加江田）に

三一回、円福寺（宮崎市加江田）に三〇回、金剛寺（宮崎市大瀬町）に二六回、木花寺（宮崎市加江田）に二三回、奈古八幡（宮崎市南方町）に一七回、沙汰寺（宮崎市下北方町）に一五回、瓜生野八幡（宮崎市瓜生野）に八回、住吉社（宮崎市塩路）に七回、瓜生野天神（宮崎市上北方）に五回も参詣をしていた。参詣一・二回の寺社を加えれば、さらにその数は多くなった［富永一九八五］。

日記が約五年分に相当する六三ケ月分しか伝存しないこと、日記が残っていても年間三ケ月程は出陣していて宮崎城周辺の寺社に参詣できなかったことを考慮すると、日々の看経・読経と合わせ覚兼の日常において信仰が大きな位置を占めていたことが浮き彫りになる。さらに宮崎城には木花寺の僧をはじめ多くの宗教者が覚兼を訪ねて語らっていた。こうした面談には当然、覚兼の信心が篤かった「法華経」など宗教的対話も含んでいたに違いない。

さて、覚兼が多く参詣した寺社を地図上で確認してみると興味深いことがわかる（図3・図4）。参詣した寺社が宮崎城の周辺と、覚兼の父親である薫兼が居城にしていた紫波州崎城への道中および紫波州崎城の周囲にまとまっていたのである。西方院、満願寺、奈古八幡は宮崎城から一km以内であり、金剛寺や沙汰寺は二・五km程度の距離にあった。これら寺社の分布範囲を凝集的な城下の範囲と捉えることはできないが、これら寺社の分布圏がゆるやかな宮崎城下域を構成したと解釈することができるだろう。

上井覚兼はそれぞれの寺社を宮崎城下の凝集域に移転

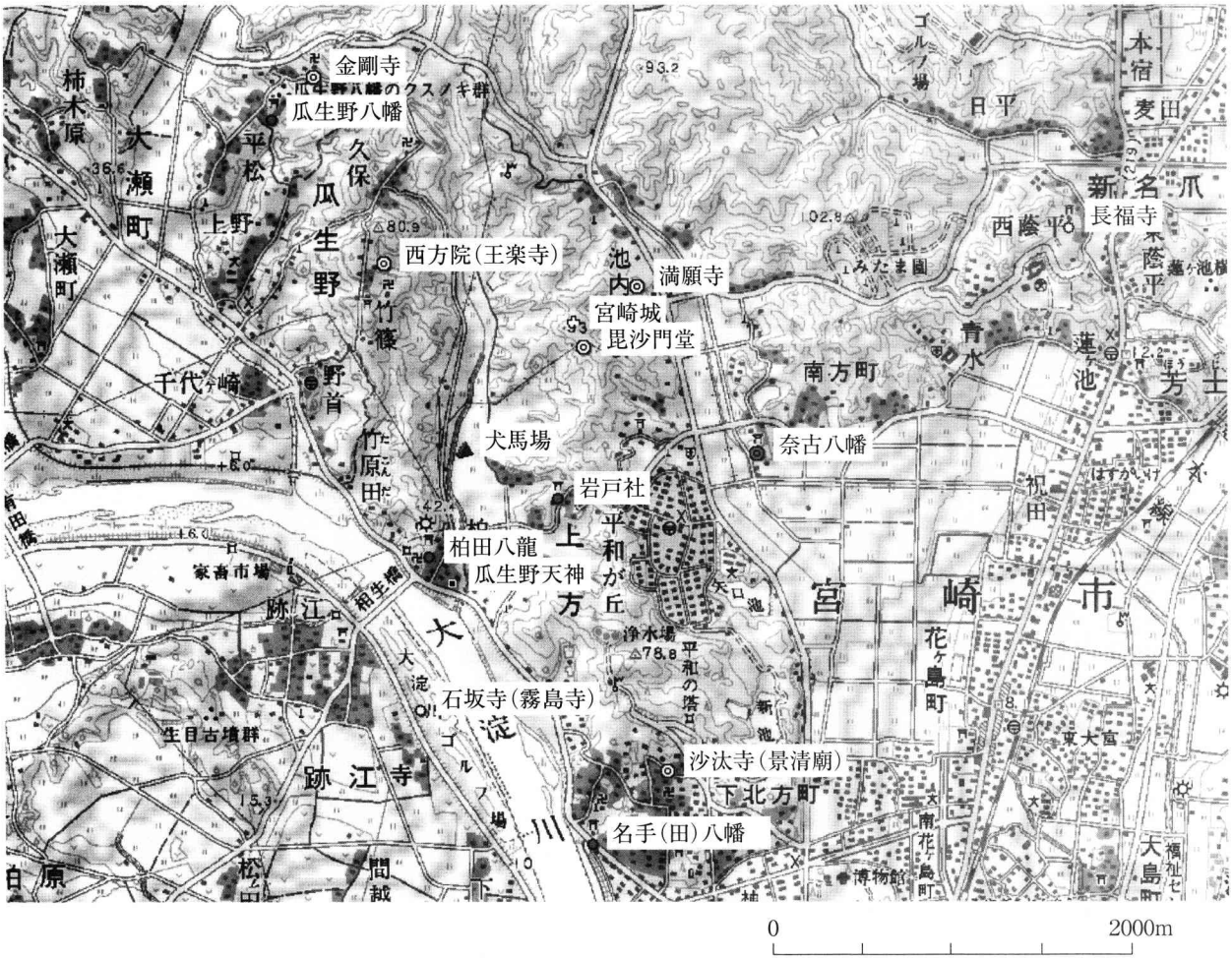


図3　覚兼が参詣した寺社1（ベースマップは1/20万地勢図「宮崎」による）

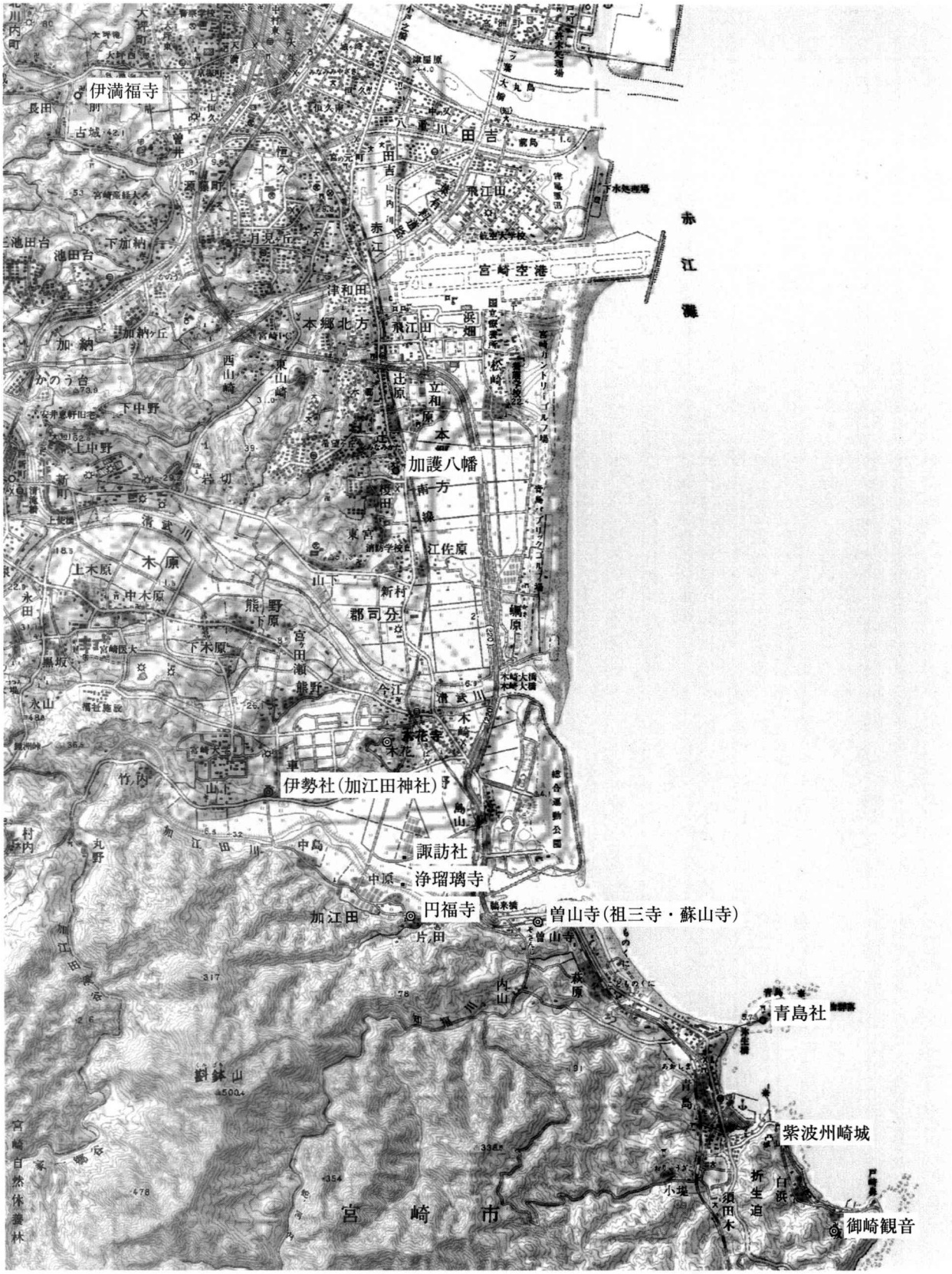


図４　覚兼が参詣した寺社２（・は詳しい所在地不祥寺社、ベースマップは１/20万地勢図「日向青島」による）

させ、たとえば寺町のように集めることは実現できなかった。それぞれの寺社の僧や神官は覚兼と日常的で人格的な信頼関係を築き、地域における文化と教養の担い手であったが、政治的には分立的様相を色濃くもったといえる。そして城下に宗教機能を一元化することがなかったため、宗教施設はそれぞれ個別分散的な立地となり、可視化されるような城下の外縁ははっきりとは展開しなかったのである。

このことは宮崎城下町の宗教センターとしての機能の問題に留まらず、都市機能全般の集約度の低さを暗示する。おそらく宮崎城下はひじょうにゆるやかなかたちで城郭―麓の武家屋敷―直属商工業者居住区―市町―寺社―湊が結びつき、広範囲にわたって都市的な雰囲気の地域を構成してできあがったものと考えられる。紫波州崎城についてもより小規模ではあるが同様の形態と推測できる。

こうした宗教施設を手がかりとした宮崎城下町の分析成果が正しいとすれば、従来充分に評価できなかった、もうひとつの戦国期城下町像を浮かび上がらせることができる。機内・東海地域を指標とするきわめて凝集度の高い戦国期城下町に対して、城を中心とした一定の地域がゆるやかに結合して都市的雰囲気を構成した分散的な城下町の存在である。「都市」の区分は地域における中心地機能の相対的な高さを尺度に分析され、さまざまな段階の「都市」が存在したことを考えると、宮崎城型の城下町を都市ではないとすること、あるいは都市か否かを問題にすることは意味をもたない。

畿内・東海型の城下町との違いを生み出した決定的な要因は、商工業者の集積度の違いにあった。日記に現れた寺社はそれぞれ当然のことながら領主としての面をもち、それぞれが職人を抱え、あるいは門前の市町とともに交易・流通にも関わっていた可能性が高い。つまり寺社を核とした職人集団の把握、交易・流通機構そのものが、実は宮崎城下町の都市機能の集積を阻んだ大きな要因であったのである。

『上井覚兼日記』にかいま見る覚兼の篤い信仰は、戦国末期を生きたひとりの武士の精神世界を鮮やかに物語るが、それは中世的な社会構造に強く規定されていたといえ、その枠組みを打ち破る思惟へとつづくものではなかった。

註

(1) ソフトは杉本智彦氏によるカシミール3D, Ver7.7ソフトを用い、計算範囲を半径二十二kmとしてシミュレーションした。ベースマップは国土地理院の数値地図を用いた。宮崎城内に三つのポイントを設定して可視範囲を合成した。

文献

桑波田興　一九五八「戦国大名島津氏の軍事組織について」『九州史学』第一〇号（福島金治編『島津氏の研究』戦国大名論集一六、吉川弘文館、一九八三年に再録）。
千田嘉博　二〇〇〇『織豊系城郭の形成』東京大学出版会。
二〇〇三「南九州における戦国期権力と城」『国立歴史民俗博物館研究報告』第一〇三集。
玉山成元　一九六九「上井覚兼の信仰」『日本歴史』第二五六号（福島金治編『島津氏の研究』戦国大名論集一六、吉川弘文館、一九八三年に再録）。
富永嘉久　一九八五「上井覚兼日記の研究(3)」『研究紀要』第十一号（昭和六十年度）、宮崎県総合博物館。
中嶋隆・坪井裕司・浅野友昭　二〇〇三『史跡小牧山旧小牧中学校用地発掘調査概要報告書(3)』小牧市教育委員会。
中野良一・沖野新一・柴田圭子　二〇〇〇『湯築城跡』愛媛県埋蔵文化財センター。
前川　要　二〇〇二「天主の成立と中世的儀礼観念の崩壊」千田嘉博・小島道裕編『天下統一と城』塙書房。

［謝辞］
宮崎市教育委員会文化振興課の方々には現地踏査や資料に関して懇切な助言を賜り、また池内宮崎城クラブの皆様には、踏査に際してご助力と教示を賜った。心から御礼申し上げたい。

（国立歴史民俗博物館考古研究部）

（二〇〇三年四月二五日受理、二〇〇三年六月二六日審査終了）

The Structure of Castle Towns and Religion in the Sengoku Period: the Case of the Miyazaki Castle Town of *Uwai Kakuken*

SENDA Yoshihiro

Miyazaki castle dates from the Sengoku period and was built on a site in present-day Ikeuchi-cho in Miyazaki city. Although all that remains are mostly castle ruins, a detailed diary left behind by *Uwai Kakuken* (1545–1589), the lord of the castle from 1580 to 1587, is an extremely precious diary (*Uwai kakuken Nikki*) as it tells of the castle's structure, buildings contained within its fortress, the basic beliefs and lifestyles of the warrior class who were considered an upper class during the Sengoku period. The study described in this paper adopts a newly established method of investigating the Medieval period that combines all disciplines (中世総合資料学), and in so doing makes an historical examination through integrating numerous physical materials related to Miyazaki castle.

The following facts and information have come to light as a result of this study. 1) Miyazaki castle is a castle from the Sengoku period that is representative of castles in southern Kyushu which were designed to stand side by side baileys with In-turned and Out-turned entrances. As such, it illustrates the unique features and sophistication of the layouts of southern *Kyushu* castles from the Sengoku period. 2) More than 20 warrior residences were built within the castle baileys, and in the center was *Kakuken's* mansion which consisted of the main living quarters, a gathering place, garden and tea room. 3) *Uwai Kakuken*, the lord of the castle, intentionally and continuously believed a number of Buddhist and Shinto beliefs and devoted an inordinate amount of time to his beliefs. 4) There was a scattering of temples and shrines that served as bases for promoting such beliefs and these formed the outer perimeter of the quiet castle town of Miyazaki. 5) The low concentration of urban functions of the castle town of Miyazaki symbolized by a concentration of religious functions can be seen as a structure in which urban functions were dispersed over a wide area. With the castle at its core and the combination of these functions gave rise to a castle town that had an urban atmosphere. 6) This produced a new kind of castle town in the Sengoku period that was different from the castle towns of the *Kinai* and *Tokai* regions (the main island of Japan) which were characterized by the agglomeration of very distinguishable urban spaces. 7) One factor that hindered an urban concentration in the castle town of Miyazaki was the scattering of temples and shrines. The beliefs of *Kakuken* were largely prescribed by the structure of this kind of medieval society.